

將軍家菩提所「知恩院」とオランダ人の訪問

今 堀 太 逸

はじめに

知恩院総墓地を東に登り切った華頂山の中腹に徳川四天王の一人酒井忠次の大宝塔がある。忠次は若年より徳川家康に仕え、三河一向一揆平定後は吉田城主となり東三河の諸士の旗頭となる。姉川、三方ヶ原、長篠、小牧・長久手の戦いなどに従軍し殊勲をたてた。家康は祖父清康の娘確井姫が妻であることもあり、十五歳年長の忠次を敬重した。また、子息に諱一字を与えたので、家督を継いだ長男は家次、本多忠次の養子となった次男は康俊を名乗った。

天正十四年（一五八六）家康に供し入洛すると、秀吉より近江国に千石と京都桜井に邸宅を与えられた。同十六年、六十二歳で出家すると一智と号し、三河時代の昔なじみの助念を開基として、今の華頂高校の東に仙求庵を開いている。

法然上人への崇敬厚く、衆庶の御廟への参詣の便宜をはかり

坂道に石段を敷いた。石碑によると文禄四年（一五九五）のことである。助念は家康が帰依した大樹寺登誉の弟子で、のち捨世派の本寺一心院（勢至堂南）の五世となる。

忠次は慶長元年（一五九六）十月二十八日、七十歳で亡くなるが、遺命により阿弥陀ヶ峰で火葬され先の墓塔が立てられた。仙求庵が菩提所となり、法名先求院殿天誉高月縁心大居士より先求院と改められた。妻の確井姫（光樹院殿宗月九心大禅定尼）も同十年（一六〇五）に亡くなると火葬され、夫の南隣に五輪塔が立てられた。酒井家より火葬の跡地が知恩院火葬場として寄進されたが、使用されることが希で、焼け穴ばかりとなり享保十八年（一七三三）に廃止された。

山科言経の日記『言経卿記』によると、徳川家康は文禄三年（一五九四）五月六日（秀吉五八歳、家康五三歳）のとき、知恩院を訪問している。言経も招かれて出かけている。

知恩院へ江戸亜相（家康）御出の間、来るべき由、石河日

向守（石川家成）昨日より相催すなり。知恩院よりも、石日向守言伝として、来るべき由これ有る間、私宅より直に罷り向う。日向守家（寺辺にこれ有り）先に立寄り了ぬ。茶飲み休息了ぬ。次に柳原（淳光）・（大草）月斎等来られ了ぬ。次に寺の僧芳胤の所へ罷り向う。両三人茶これ有り。次に寺の奥一寺へ罷り向う。数刻待り申す処、小餐これ有り。次に未刻に亜相知恩院へ御出の間、迎に罷り向い了ぬ。亜相・柳原・予（言経）・寺住（浩蒼聡補）・同弟子（満蒼尊照）・山名禪高・月斎・宗カツ（喝）・了頓等なり。濟々の儀なり。酉の下刻に各おの御帰り畢ぬ。予暮れ過ぎ帰宅し了ぬ。

石川日向守家成（一五三四～一六〇九）の母は家康の実母於大の方（伝通院）の実姉（妙西尼）である。父は安芸守清兼で三河国西野（豊田市松平）の生まれである。永禄六年（一五六三）の三河一向一揆に際して一族と別行動を取り、浄土宗に転宗して家康に従った。当時、知恩院の近くに邸があり、たびたび知恩院に参詣している記事が『言経卿記』にみられる^①。

本稿では、第一、家康と知恩院では、家康の家族の死去と葬儀、第二、伽藍の整備では、大伽藍が整備された経緯をたどる。第三、住職任命と尊像・尊牌の安置では、江戸城における住職の任命と徳川家の位牌の安置を検討する。

そして、第四、オランダ人の訪問では、オランダ商館長一行とともに知恩院を訪問したケンペルの『江戸参府日記』を読み解くとともに、第五、塔頭徳林院において、『日鑑』におけるオランダ人訪問の記事と案内を担当していた塔頭徳林院住職について検討したい。

最後に、第六、下乗石についてでは、ケンペルも興味を示した下乗というしきたりについて、知恩院三門における下乗札、下乗石設置の経緯を明らかにする。また、附「参考資料」として、知恩院が江戸幕府に対して説明していた「知恩院の由緒」と「徳川家先祖と浄土宗」について、史料紹介しておきたい。

第一 家康と知恩院

①家康母の葬儀

豊臣秀吉の生母（大政所・天瑞院）は文禄元年（一五九二）七月二十二日死去した。山科言経は八月六日の本国寺（法華宗）におけるの仏事を見物に行き、翌七日の巳刻に大徳寺から出発、蓮台野での火葬を『言経卿記』に記載している。

今日（七日）巳刻ニ大徳寺ヨリ蓮台野ニテ火葬也云々、諸寺之僧悉焼香ニ出と云々。龕以下の美麗不及筆云々、貴賤道俗見物方万々也云々。

そして、文禄四年七月、甥で養子の秀次を高野山に追放し自害させ、八月二日に三人の子と妻妾三十二人を三条河原で斬殺したが、それを貴賤群衆に見物させている。その一方、九月には故母の父母らの法事を大仏経堂（妙法院）において、八宗の僧侶たちに命じている。九月二十二日より、毎月、一宗より百人の僧侶の出仕を要請したのである。

家康の母於大の方は、実家の水野氏が敵対する織田氏に加担したため離別させられた。家康は晩年その母を伏見城に招き、世話をしていたが慶長七年（一六〇二）七十五歳で亡くなった。葬儀の導師を勤めたのは知恩院の満誉である。慶長八年家康は母を弔うため、知恩院を菩提寺と定め、秀吉の寄進した寺領の三倍にあたる七〇三石余を寄進し、將軍家の菩提寺にふさわしい大伽藍の造営を命じた。

②家康次男秀康と二女督姫

家康の次男秀康は、結城晴朝の養子となり結城家を継いだ。のち松平姓に復して福井藩六十七万石を支配したが、慶長十二年閏四月八日逝去した。「御先祖浄土宗門御由緒之事」〔知恩院古記録〕によると、秀康は結城家菩提所の曹洞宗の寺、福井孝顯寺に葬送の上、孝顯寺殿吹毛月珊大居士と称した。このことを聞いた父家康は、

我家者浄土宗也、結城を名乗候ハ、可然候へ共、既二復姓松平之上者、今般禪宗二可被改事如何、

と上意した。よって当山（知恩院）の満誉大僧正が導師として下向、浄土宗へ改葬されたという。法号も浄光院殿と改められ、満誉を開基とする浄光院（のち運正寺）が建立された。

知恩院黒門を下りたすぐ右手の塔頭良正院は、家康の二女、姫路城主池田輝政夫人督姫の菩提所である。十九歳で対立する小田原北条氏との和睦のきずなとして氏直に嫁ぎ、秀吉の小田原攻めにあつた。夫が病没すると、子の無かつた督姫は、秀吉の仲立ちにより三十歳で池田輝政に再嫁した。

忠継・忠雄・輝澄・政綱・輝興の男子が生まれ、夫は関ヶ原の合戦の功績で播磨五十二万石、姫路城主となった。慶長十九年の大坂冬の陣には、前年に死去した夫輝政にかわり息子たちが馳せ参じた。講和が成立すると、督姫も二条城に父家康を見舞うが、滞在中に疱瘡を患い亡くなった。享年五十一歳。葬儀は家康の上意で、満誉を導師として執行され、知恩院の裏山に埋葬された。備前岡山城主となった督姫の子息忠雄には、母の埋葬地である知恩院山内に菩提寺を建立する宿願があり、母の弟、將軍秀忠の許しを得た。知恩院では、有力な役者宗把の住房浩翁軒（院）をもって菩提所とすることにした。

寛永八年（一六三一）に造営がなり、供養料五十石が寄進さ

れ、寺号も法号良正院に改められた。良正院は、忠雄の子光仲が鳥取城主に国替えされて、以後は因幡鳥取藩主池田家の菩提寺となった。墓は法然上人の御廟のある裏山の中腹にあり、「慶長廿年二月五日、良正院殿智光慶安大禪定尼」と刻まれた五輪石塔が西向きに建っている^③。

③家康孫千姫

家康の孫の千姫は、將軍家光の姉として大奥などに隠然たる勢力を持つが、老病のため寛文六年（一六六六）二月六日、七十歳で亡くなった。その夜、遺骸は家康の母於大の方の墓所小石川伝通院に納められた。生前の帰依により葬儀導師は知恩院玄譽知鑑に命ぜられた。知鑑は銀三百枚、小袖十、米百俵の布施を賜った。四月になり千姫の邸宅が毀たれると、浄土宗の飯沼弘経寺・江戸新知恩寺・深川浄信寺などに譲られた。

御菩提所の定例により知恩院にも分骨され、勢至堂に尊牌（天樹院榮譽源法松山大禪定尼）がまつられ、背後の眺望絶景な濡髪祠前に宝塔が立てられた。また、永代常行念仏のための祠堂銀により、後には千姫の母崇源院や將軍綱吉の母桂昌院の位牌も安置され、勢至堂は徳川家の女性を供養する常念仏の道場となる。葬儀導師を勤めた知鑑は六十九歳の延宝二年（一六七四）伊勢清雲院に退隠すると、千姫追福のため寂照寺を開いている。

第二 伽藍の整備

①秀忠・家光と知恩院

家康は慶長十三年（一六〇八）八月二十五日、母の七回忌を迎えるにあたり、駿河城に増上寺存応を招き血脈を伝受された。翌日同城で存応以下百三十名の浄土宗の僧侶を集めて法問が行われたが、秀忠も父とともに拝聴している。

二代將軍は凡庸ではなかった。厳しく大名を統率し、娘和子を入内（東福門院）、孫娘の明正天皇を即位させた朝廷政策、キリシタン禁令教化の外交政策など、幕府二六〇年の基礎を築いた政治手腕が高く評価される。

知恩院隆盛の基盤をつくったのも秀忠であった。家康が元和二年（一六一六）亡くなると、翌元和三年上洛、知恩院奉行に川勝信濃守広綱・宮城丹後守豊盛・五味豊直を任命した。元和五年、我が国最大の構えを誇る一山伽藍の正面にあたる三門と、経蔵を造立寄進した。経蔵には、十二世紀に中国福建省の開元寺や東禪寺において刊行された宋版一切経五六〇〇余帖が納められた。

元和六年（一六二〇）満誓が亡くなると、父幼少のときの手習いの友であったという京都浄福寺（一説に武蔵天獄寺）の城誉法雲に知恩院住持を命じた。秀忠は仏教諸宗の年賀拝賀のあ

にも浄土宗の法文をよく聴いたが、毎年、知恩院からは綴子一卷と杉原紙二十帖を贈っていた。父に劣らない熱心な浄土宗信徒であった秀忠は、後に知恩院住職となる雄誉靈巖の説法を子息家光とともに江戸城西の丸で聴聞し、正室お江戸の方（浅井長政の娘、淀君の妹）が先立つと、増上寺に葬り浄土三部經を一万部読誦する中陰の法事を営んだ。浄土宗における万部会の始まりといわれている。

秀忠はまた、皇都平穩・西国鎮護のためと称して、神君様（家康）の寿像を本堂西壇に祭らせた。知恩院では秀忠像も安置し、親子の尊像を「帝都鎮護の御影」と呼んで、その影前において天下安全・武運長久の祈願法会を修した。

浄土宗は將軍家の宗旨としての地位を確立していくが、その総本山である知恩院が、寛永十年（一六三三）正月九日火災にあった。大小の方丈や庫裏・御影堂・集会堂以下が炎上し、類焼を免れたのはわずか勢至堂・阿弥陀堂・三門・経蔵のみであった。

三代將軍となった家光は、知恩院は將軍家にとって格別の寺（將軍家宗旨浄土宗総本山・先祖超普住職の寺）であるとして、直ちに復興を議し造営奉行を任命した。法然上人の御影を安置する「大殿」と呼ばれるにふさわしい本堂（御影堂）、狩野一門による華麗な障壁画が描かれた大小の方丈、本堂と方丈をつな

ぐ廊下などが建造され、旧に倍して寺観が整備されるとともに、除夜の鐘で名高い大銅鐘が鑄造された。

諸堂が再建された寛永十八年六月、家光は江戸城に住持靈巖を招き「天下和順」の法文を聴聞した。八十八歳と高齢の靈巖は、城中での杖の使用を許されたが、その滞在中に客死した。家光も祖父や両親の御廟と霊牌所のある増上寺に月参りをし、年忌法事には万部会を勤めて先祖を丁重に供養した。その法事のたびに知恩院から声明衆が下向していた。

③大伽藍造営と伝説

知恩院奉行にもなり、畿内の民政に活躍した五味豊直、通称金右衛門は関東出身の武将である。父政義はもと甲州武田氏の家臣で、勝頼が敗れたあと家康に仕えて武蔵国に移り、天正十八年（一五九〇）死去した。八歳で父の跡を継いだ豊直は、秀忠の信州上田城攻撃に従い、大坂冬の陣に際して畿内に入ると落城後の大坂城内の金銀の点検と管理をした。ついで山城国の天領二万石の支配を命ぜられ、丹波国の郡代にもなり、寛永十一年京都所司代を補佐する代官奉行に任じられた。万治三年七十八歳で亡くなると、寺町二条の日蓮宗妙伝寺（現・東大路二条）内の正善院に葬られた。

豊直は大工頭の中井家や絵師職人を支配下におく狩野家を統

括して、城郭や社寺を造営する作事・普請奉行としても活躍した。京都行政を担当する代官奉行として、將軍家菩提所知恩院の発展に尽くした功績には大きいものがある。夫妻の法体姿の木像が知恩院三門の中二階に安置されているのは、秀忠による三門・経藏造営の際の責任者であったことによると推察できる。

この夫妻の木像から伝説が生まれた。大工棟梁金右衛門は小規模にとの内命にもかかわらず、見事な三門に仕上げた。造営費がかさみ、大勢の職人たちに支払う金がなくなった。そのため棟梁夫妻は、二人の木像を作り白木の棺桶に入れ三門の中二階に安置し、一切の責任を負って自害したというのである。知恩院七不思議の一つとして語り継がれている。

御影堂正面東のひさしに、紙が破れて骨だけの傘が揚げられている。寛永十六年再建の際の住職靈巖が弥陀の名号を書き、火除けのまじないとしたというが定かではない。むしろ「左甚五郎の忘れ傘」としてよく知られ、知恩院名物となっている。延宝三年（一六七五）の『延碧軒記』に、左手で細工を上手にする左の甚五郎というものがいて、北野天満宮の透かし彫り、豊国神社の龍の彫り物を作ったという。作品が日光東照宮の眠り猫など全国に数多く伝えられているが、製作年代に隔たりがあつて、実在の人物とすると何人もの甚五郎がいたことになる。姓の左は名工を多く輩出する「飛騨国」から出た、伝説上の欄

間彫刻の名人である。

忘れ傘にはもう一つ、知恩院の伽藍を守護する濡髪童子という白狐のしわざとの伝説がある。靈巖の説法に救われた狐がご恩に報いるため火災守護を約束し、その神通力を示すために置いたというのである。鎮守濡髪の祠は勢至堂墓地にあるが、髪（紙）が濡れるということより男女の縁結びの神として花柳界の信仰を集めている。

この御影堂棟上には二枚づつ四枚の「葺き残しの瓦」がある。大建築が完成すると魔が差し不吉なことがおこるので完成しないこととしておくためだという。根拠のない伝説も少なくないが、甚五郎が魔除けのために傘を置いたとも語られるように、総本山・菩提所としての護持繁栄を願う思いと、時代の素朴な庶民の信仰とが結びついて形作られたものといえよう。

第三 住職任命と尊像・尊牌の安置

①菩提所の住職任命

知恩院の住職は大旦那である將軍家が江戸城において任命していた。明和五年（一七六八）、知恩院が幕府からの問い合わせに返答した「起立開山名前・御由緒・寺格等書記」（『御当山（知恩院）開山草創・御菩提所・御祈願所之記』所収）がある。そ

れには、ただいまの知恩院は、法然上人入滅の建暦二年（一二二二）より慶長八年（一六〇三）の秋まで三九二年が過ぎ、上人の大谷の庵室三カ所を大檀那権現様が「知恩院一寺に御開基成し下され置き候」慶長八年より明和五年まで一六六年になると述べている。

家康が知恩院を菩提所としたことについては、

一、文禄年末、知恩院住持満譽尊照、権現様伏見御在城、知恩院御参詣遊びなされ、当院は先祖超譽存牛上人御住職の寺、由緒これ有る間、京都御菩提所に仰せ付けられ候事。

と述べて、家康が知恩院を京都菩提所としたのは、先祖松平親忠五男の超譽上人住職の寺であったことによると説明している。⁽⁴⁾

紫衣は出家行徳の衣服、緋衣は出家僧正の任服とされたが、幕府による知恩院住職の大僧正任命について、

一、慶長十五年五月、住持満譽尊照江戸参府、御城において、大僧正に仰せ付けられ緋衣下し置く。上意を以て、殿中において紫衣を脱し、拝領の緋衣を着し退出仕り候と、江戸城での満譽任命を先例としてあげて、大僧正任命の際には殿中において緋衣を着し退出することになっているという。また権現様家康が、満譽大僧正に隠居を願ひ退寺しても紫

衣を着服するようにと仰せ置かれたことより、知恩院住職に限り隠居後も紫衣着服を許されているという。

②将軍家の位牌安置

家康の知恩院造営の目的は、将軍家の菩提を弔う施設を必要としたためであり、将軍家の御影や位牌が諸堂には安置されていた。いま御影堂と呼ばれている大伽藍は本堂と呼ばれ、その西須弥壇の厨子には家康と、その母伝通院（徳泰院殿）、子息の二代将軍秀忠の木像が安置されていた。本堂裏の集会堂仏間には三代家光と四代家綱の絵像、大方丈仏間には家康の位牌以下、歴代将軍の位牌。小書院仏間には家康の先祖、松平親氏以下八代の位牌を安置、また御霊屋（御神殿）には東照宮と台徳院（秀忠）の尊影がまつられていた。

『日鑑』享保十六年（一七三二）八月十一日によると、東照宮と台徳院の尊影を宝蔵から持ち出し、本堂西仏壇に安置したとの記載があり、そのため阿弥陀仏立像を東仏壇に移し、座像の阿弥陀像は集会堂に移すことになったと記している。

東照宮・台徳院殿の両尊影、唯今迄宝蔵に納め置き候処、供養申し上げず、龜末の儀に思召しに付き、本堂え徳泰院殿御影の左右へ今日遷座なり奉り候。月番・山役・山内大衆等はこれを昇く。右御供養の法事、護念経（阿弥陀経）

を誦誦、御丈室（四七世照誓見超）御出座、山内大衆等出勤す。右両尊影御安座に付き、立像の阿弥陀仏は、東仏壇へ移し、座像の弥陀ならびに位牌等は集会堂へ移す。⁽⁵⁾

知恩院は將軍家の菩提所であるので、京都所司代と東西の両町奉行は、正月やお盆、毎月の月忌には仏参りをしていて、本堂の家康以下の厨子、大方丈の位牌、御霊屋にお参りしたあと、小方丈で御斎を頂き、住職と歓談することになっていた。そのため、知恩院住職が亡くなった場合も、遷化の届け書とともに、参詣の道筋（唐門より御牌前迄）に、触穢のない旨の書付がしたためられた。

③「尊影・尊牌御安置并御廟所之覚」

知恩院諸堂における尊影・位牌安置の様子を、寛政三年（一七九一）の『尊牌御廟等御安置御由緒書』付載の「尊影・尊牌御安置并御廟所之覚」により掲載しておく（*は『起立開山名前・御由緒・寺格等書記』による補足）。

◇本堂仏殿

東照宮東帯尊影。最初建立の節、西国鎮護のため安置。台徳院東帯尊影。東照宮の思召を継がれ安置。伝通院荅誓光岳智香大姉尊影。東照宮当山を菩提所に定めた最初に安置。

*本堂正面須弥壇宮殿に開山法然上人真影。西須弥壇に権

現、西国鎮護のためとの上意によるとの申伝え。次に伝通院尊影、次に台徳院尊影を安置。三方とも厨子入り。

◇集会堂仏間

大猷院尊影絵像・嚴有院尊影絵像。宝台院（秀忠母、西郷氏）・天崇院（秀忠娘、勝姫）・浄徳院（綱吉息、徳松）の位牌。

*仏壇中尊阿弥陀如来三尊。三方の位牌。左方に大猷院絵像、右方に嚴有院絵像。

◇大方丈仏間

東照宮・台徳院・大猷院・嚴有院・文昭院（家宣）・有章院（家綱）・惇信院（家重）・清揚院（綱重）・天英院（家宣室、照姫）・浄琳院（家継室、吉子内親王）の位牌。以上は公儀より安置。

常憲院（綱吉）・有徳院（吉宗）・孝恭院（家基）・浚明院（家治）の位牌。当知恩院において安置。

*仏間中尊阿弥陀如来立像。安阿弥作。左方に権現位牌。右方に台徳院位牌。それより代々惇信院までの位牌安置。

◇小書院仏間

芳樹院（親氏）・良祥院（泰親）・崇岳院（信光）・松安院（親忠）・掉舟院（長親）・安栖院（信忠）・善徳院（清康）・瑞雲院（広忠）の位牌。先祖親氏より広忠までの八代は、家康の

命による安置。

◇御神殿

東照宮様神影御鎮座 台徳院様尊影御安座。この二座は家光の命により慶安元年京都所司代板倉重宗が神殿を造営、安置。

◇勢至堂

常行念仏の道場。崇源院（＊台徳院様御台様）・天樹院（＊台徳院様姫君様、東丸様と称申候）・桂昌院（＊常憲院様尊母公）の位牌。公儀より安置。

＊「小庫裏 右尊霊方御供所。大庫裏、衆僧食堂。右之通、

知恩院一字、尊影・尊牌奉御安置候」

◇御廟所

天樹院廟所（「当山三十七代玄譽知鑑大和尚、依御帰依、御新葬導師相勤候ニ付、御菩提所之定例を以、山上ニ奉造立」）。

浄琳院二品内親王廟所（「霊元院帝皇女、有章院様御縁女、右尊骸当山え被為入、山上ニ御造立」）。

良正院殿智光慶安大姉廟所（「東照宮様嫡女、右者、依台命、当山・被為入、御廟所在山上ニ有之候」）。

超誉上人廟所、山上にあり。

第四 オランダ人の訪問

①オランダ人の京都滞在

オランダ東インド会社の日本支店（オランダ商館）は、慶長十四年（一六〇九）平戸に置かれ、寛永十六年（一六三九）にポルトガル人の来航禁止により長崎出島が空屋になると、同十八年四月に平戸から長崎出島に移転した。

寛永十年より始まるオランダ商館長の江戸参府は、正月に旅立ち三月に江戸城で将軍に拝謁した。毎年定例として、寛政元年（一七八九）まで行われ、翌二年から五年目ごと、四年に一度となった。

江戸参府は彼らが日本を知る唯一の機会であり、その帰りの京都での二泊の休暇は楽しみの一つであった。夕方到着し、翌日に所司代と東西両町奉行を訪問し贈り物をうけた。

衣類や小間物など土産物を購入したが、通詞が点検して仏像などは返却された。出立の日は、最初に將軍家京都菩提所である知恩院を訪問し、祇園社、清水寺などを訪れ伏見から船で淀川をくだった。

京都の宿泊所である阿蘭陀宿海老屋に関する史料が神戸市立博物館所蔵池永コレクション「皇都阿蘭陀人宿（荷蘭館）文書」「村上家（阿蘭陀宿）文書」の名で整理されている。そのなか

に、『阿蘭陀宿用向手続』（本文四八丁表紙付一冊）があり、記載内容により九七箇条に分類されている。片桐一男氏が『京のオランダ人―阿蘭陀宿海老屋の実態―』に詳しく史料紹介されているので、参考までに抄出しておく。⁶⁾

・京都到着。

（三七）京着前日、前宿まで飛脚差立て、歎状。（三八）着当日、蹴上迄出迎え、着届け。

・二日目

（四七）所司代出座、差上物・御礼口上、列席休息、茶菓、
（四八）横文字所望、通詞和解。（四九）カピタンの帽子・剣
御覧。（五〇）カピタン暇乞。（五一）門番へオランダキセル
差贈り。（五二）町奉行所へ参上。（六〇）蘭人帰宅、向々より
り使者入来。所司代をはじめ向々より使者。所司代から時服・
御銀。オランダ側から煙草盆（オランダ煙草・キセル）・御
茶・オランダ銘酒・オランダ蜜漬物一壺にて接待。使者入来・
応対の着座の図示あり。（六一）大小通詞、向々へ被下物御
礼、出立伺い。（六二）出立伺いの節、月番御奉行所へ書付。
通詞が御礼・出立日伺いの際、海老屋が付添い、月番奉行所
公事方に書類を提出、蘭人が祇園見物の際の警備役人の出役
を願ひ出る。徳林院（知恩院塔頭）へも知らせる。

・出立日

（六四）「蘭人出立先払、知恩院・祇園社・二軒茶屋・清水寺・大仏・三十三間堂参詣、稲荷前休息の事」。蘭人出立先払いには仲座一人・助仲座一人の出役を得る。参詣・休息先へは前日のうちに海老屋から通知の願ひをしておく。知恩院の徳林院の方丈拝見、二軒茶屋中村屋かめ方で休息、清水寺では寺内歩行、大仏・三十三間堂でも同様で、特に三十三間堂では内陣を一見する。伏見稲荷前の玉屋平右衛門方での休息のとり方は、蹴上宿の弓矢八郎兵衛方の振り合いと同様である。

②ケンペルの知恩院訪問―元禄四年・五年―

元禄三年（一六九〇）、オランダ東インド会社の医師として長崎に渡来ドイツの医学者ケンペル（一六五一―一七一六）は、翌元禄四年（一六九一）と五年の二度にわたり商館長の江戸参府に随行した。その体験をもとに、日本の歴史・政治・社会・地理などを『日本誌』に著した。

そのときの『江戸参府旅行記』は、ケンペルの誤解や誤訳と思える記事が多いのであるが、將軍家の京都菩提所として知恩院を紹介していること、後述の『日鑑』にみえる饗応記事と一致することが興味深く、少し長くなるが読み解いてみる。⁷⁾

(一) 第一回知恩院訪問 元禄四年三月二十日

最初に、知恩院を將軍家の立派な寺であり、二代將軍徳川秀忠の寄進により、一山伽藍の正面に建造され、元和七年(一六二二)に完成した三門の立派さに驚き、乗り物から降りて歩いて訪れる「下乗」という仕来りを紹介している。

【將軍家の寺】われわれは知恩院に着いた。將軍家の立派な寺である。【三門】門は立派で大きく、高く二重の屋根がある。こういう屋根は、この国では城の天守閣や寺院でよく見られるものである。【下乗】われわれは乗物から下りて、足を地面につけたが、下乗するのは敬意の表わし方の一種で、將軍のほかは、この国のすべての高貴な人々もこのようにするのである。

ついで、【境内景觀】【本堂】【方丈客殿】【庭園】を紹介し、將軍位牌の安置について記載している。

【將軍の位牌】左側の一つの門をくぐってここから三〇歩ばかり進むと、山麓の少し高い所に小さな寺があって、その寺内には死んだ將軍の名前を書いた位牌が保管してあった。堂内の周囲と仏壇の前や両側には足の短い椅子が置いてあって、その一つ一つの上にも文字を書いた三枚の紙片と一枚の小さな紙片が置いてあったが、これは嚴有院(四代將軍家綱)の靈に捧げるための祈祷の法式であった。

【賽銭箱】について、小銭を投げ入れるために、荒い格子の付いた二、三個の賽銭箱が堂の前にあり、箱の前には説教の時に使う少し高くなった小さい椅子が置いてあったと記しているが、当時の説教が行われていたのは、京都門中の寺院により毎月二十五日に勢至堂において行われていた法然上人御報謝説法である。

案内をしてくれたのは、屈強で健康そうに見える若い僧侶たちであり、彼らはかなり学があるように思われたとの印象を記し、そのもてなしと、見送りについて記している。

【饗応と見送り】ここから僧侶たちはわれわれを伴って、外観は粗末に見えるが、中はかなり優雅な別の建物に入って行った。その中央の部屋は、読経ができるようになっていたが、また同時にわれわれのために接待の準備もしてあった。料理は茸・煮豆・焼菓子・果物・根菜・野菜および酒などで、われわれには六人の僧侶が給仕に出たが、彼らのうちで一番年上のは二六歳、一番若いのが一六歳ぐらいらしかった。一時間半たつと、二人の僧が、この重要な將軍家の寺院の並木道の境、すなわち前の大広場の所まで見送って来た。この寺院の周囲には、なお二七の他の寺があるということである。自然のままの遊歩森をぬけて数千歩ゆくと、祇園の社がある。

(二) 第二回知恩院訪問 元禄五年三月二十五日

知恩院訪問の前日、二十四日の所司代と東・西町奉行所を訪問したさいの贈答を、

【二条三所訪問】所司代(小笠原佐渡守長重)がカピタンに五領の美しい時服を贈って来たし、両町奉行(東町・前田安芸守直勝。西町・小出淡路守守里)も各自銀五朱を贈り物として届けて来た。この贈物は、いつも特別な上書きをし水引をかけ、五つに折りたたんで包み、普通の進物台の真ん中に紙に包んで置いてある。

と記し、土産物として購入することが禁じられていた仏像を通詞に検閲され、差し出している。

二十五日は、軽い日本食の朝食をとり、慣例に従い主人に小判一枚を与えてから、神社・仏閣を見物するため、駕籠に乗って出かけている。

知恩院訪問については、知恩院は立派な寺院で、南無阿弥陀仏と唱える浄土宗である。八〇〇年前に建立されたということであると語り、将軍家の菩提所であり、将軍の宿泊所ともなっている」と記載し、将軍家の寺であることを頻りに強調し、遺骨が安置されているともいうのである。

【将軍家菩提所】将軍がこの地を通る時には、この寺に泊る慣例があり、それで寺のはずれに特に大きな御殿がある。

去年の参府旅行の折りに述べたところであるが、そこでは将軍蔵有院「四代将軍家綱」を追懐し、仏間の中にその肖像を飾って、これを敬うのである。また絵のように見える左手の庭園の後ろの山の小高い所にもう一つ堂(権現堂)があつて、将軍の遺骨(木像)が安置されている。

なお、四代将軍家綱が死去したのは延宝八年(一六八〇)五月八日であり、天海が幕府の援助で建立した天台宗関東総本山寛永寺に葬られた。増上寺や檀林が愁訴したので、浄土宗においても位牌が安置し諷経することとなった。知恩院には絵像が安置されることとなり送られてきた。

同年十一月九日付の絵像裏書によると、寛永寺の宮殿(くうでん・棟のある厨子)安置の蔵有院木像を狩野永真が写したもので、納めるための宮殿を仕立てるように命じている。集会堂仏間に父である三代将軍家光の絵像とともに安置され、供養されていた。安置の場所は京都所司代内藤重頼が吟味し決定したものである。

ケンペルが訪問したときの知恩院住職は、元禄四年十二月、鎌倉光明寺より晋山した四十一世宏誓良我(同六年十二月寂、六十三歳)であった。良我との対面するとき様子が記載されている。

【知恩院の和尚】われわれが裏の方にある広間に入ってゆく

とすぐに、変化に富んだ峻しく突き出している丘の上の居心地のよい所に住んでいるこの寺の和尚は、われわれについて報告を受けていたようであった。彼は間もなく、僧の身なりの着飾った少年と、衣を着て頭を剃ったもう一人の少年と、約一〇人の剃髪した若い僧を伴って姿を見せた。われわれは、この和尚を見て、親しみやすく丈夫そうな老人（六十二歳）と思った。彼が着ていたのは、ゆつたりとした紫色ないし紫紅色の法衣で、払子を持ち、金糸で分厚く刺繍した袈裟を横にかけ、われわれを見ようとして、遠くに立止っていた。そしてわれわれに対し、他の二、三人の僧に命じて一杯の茶を出させた。これに対して、われわれは紙に包んだ一分金を和尚に渡した。広間の両側の出口の傍に彼は数人の僧侶を序列順に並ばせ、彼自身は簾の後ろのはずれに坐っていたが、彼はこうすることで自分の威厳を認めさせようとしたのは疑う余地がない。

このように、ケンペルは將軍家菩提所としての知恩院を興味深く観察しているのであるが、やはり、除夜の鐘として著名な釣り鐘には驚いたようであり、搗いてもらっている。⁽⁸⁾

参考までに、知恩院の門前について述べておくと、門前は総門より縄手通りに至る古門前通りと、表門前より縄手通りに至る新門前通りからなり、二筋の間を分けて白川が流れている。

古門前石橋町には平戸松平家と熊本細川家の藩邸が置かれていたが、今も古美術商が軒を並べ古い京情緒がたどよう。新門前は祇園・八坂につづく遊樂の地として賑わい、茶屋や貸座敷、諸道具屋が店を構えた。両門前町は元禄期の前後に開けたもので、正徳四年（一七一四）門前八町の家数は一八一軒、庶政は知恩院雑色が支配し、洛中の町組に編入されることなく独自の領域を維持した。

井原西鶴の『好色一代男』には、宮崎友禪が描いた扇が京都では大層評判であると記されているが、その店は知恩院門前にあった。

元禄九年（一六九六）に刊行された『人倫重宝記』にも「都にはやる友禪扇はちかごろの名物」と紹介し、「ゆうせん」の暖簾をかけた店先で法体姿の友禪が絵筆をとり、そのかたわらで扇の地紙を折る女が描かれている。友禪は色彩はなやかな友禪染めの手法を考案し、その祖とされるが、「染工」としての事績についてはよくわからない。しかし知恩院門前に住み、扇絵や小袖の文様を描く絵師として名声を博していたことは確かなことである。⁽⁹⁾

第五 塔頭徳林院

『阿蘭陀宿用向手続』に知恩院の担当者が塔頭徳林院であることが記載されている。徳林院は崇泰院の南、三門の北にあった塔頭で、慶長年間（一五九六～一六一五）に一誉法意の開基（同十四年没）である。

『知恩院史』の「塔頭誌」には、「知恩院蔵徳林院過去帳」により、当院住職名と寂年、明治三十九年の円山火災による真源院、樹昌庵の類焼に鑑み、三門防災のため明治四十一年、祇園北林に移り、既成院と合併、既成院寺中にその旧屋を存していることが記載されているが、沿革の歴史は詳らかでない。⁽¹⁰⁾

・開基 一誉法意、

慶長十四年（一六〇九）一月二十五日寂。

・中興 靈誉源廓、光蓮社と号す。

寛文十二年（一六七二）二月十日寂。

・第三世 忠誉源曆 玄蓮社と号す。

元禄九年（一六九六）八月十九日寂。源曆は八月十九日寂したが、『日鑑』十月二十五日によると、源曆の遺品に狩野探幽筆「滝見観音」一幅がある。源曆は知恩院役者として幅広い活躍を

している。

・第四世 霽誉感歴 苾芻と称す。

元禄九年十一月住職、正徳四年（一七一四）十二月八日寂。源曆の後継には、四十二世白誉秀道より十月二十五日、塔頭忠岸院の住職であった感歴が徳林院転住を命じられ、十一月五日に住職を仰せ渡されている。

『日鑑』元禄十一年六月四日に、

一、徳林院取次平野や八左衛門死去二付、御丈室御焼香。本

堂（現、御影堂）において葬礼。方丈内残らず、一山大

衆集会。法名往誉浄貞。

とみえていて、徳林院との取り次ぎをする有力な檀越に、知恩院本堂（御影堂）において葬式をし、知恩院住職が焼香するほどの商人がいたことがわかる。

オランダ人参詣についての『日鑑』記事としては、元禄十二年三月二十一日に、

一、九ツ時分、当院見物ニ参候、阿蘭陀人。

と記載しているのが、伝来する『日鑑』における初見であり、翌元禄十三年（一七〇〇）三月二十四日に、

一、九ツ時前ニ阿蘭陀人参る。大通辞横山又次右衛門・小通辞志筑孫平・荒木四郎右衛門・又次右衛門子息。右の四

人え蕎麦切・御吸物・御盃下され候。

一、阿蘭陀人え、御酒核御馳走これ有り候。多葉粉一包宛下され候。

と、詳しく記載している。

オランダ人には酒とたばこ、同行の大通詞横山又次右衛門とその子息、小通詞志筑孫平・荒木四郎右衛門の四人には蕎麦切り・吸い物・酒で饗応している。二十四日は二代將軍秀忠の月命日であり、武家衆の斎参りがあつたので、オランダ人も將軍家菩提所としての知恩院の仏事を見学する機会となった。⁽¹⁾

塔頭徳林院の住職が案内の世話をしたことを『日鑑』に記載する初見は、後述の元文二年（一七三七）からである。恒例のことでもあり来訪の事実のみの記載となる。

『日鑑』宝永三年（一七〇七）三月二十四日、

一、阿蘭陀人四人并に与力・同心・通司⁽²⁾式人、方丈内一見。小方丈において、右の人数へ饅頭・吸物・酒核出る。

『日鑑』正徳四年（一七一四）三月二十五日、

一、阿蘭陀人参り候え共、雨天故、見物仕らず。罷り帰り候由。

雨天のため見物できない年や、事務の僧が出かけていて方丈内の見学を断ることもあったのである。簡単な記載ではあるが、参詣者のオランダ人の名前が記載されている年もある。

感歴は正徳四年十一月二十三日、仏壇と隠居所の普請願いの口上書を東町奉行山口直重に提出、二十七日許可された。十二月八日には、後継住職には、「一家の内」（親族）である両親が一向宗の下間氏に務めている、周防徳山毛利飛騨守殿家来英保勘解由の倅亀之助を願ひ出ている。

『日鑑』十二月八日、

一、徳林院感歴儀、此間大病、内々弟子契約仕り度き願ひ。両親下間の務、一家の内、周防徳山毛利飛騨守殿家来英保勘解由と申者倅亀之助と申者、弟子二願ひ申し上げ候事、此段申し上げ候処、右の者相違なく候ハ、役人了簡次第仕るべく候。若し一向宗の筋、宗体の子共杯二候ハ、堅く罷り成らず候。此旨吟味仕るべく御意二御座候二付、由緒書付これを取り申し候事。則ち両親へ、吟味の上、相違なく候ハ、仰せ付けらるべく旨申し渡し候。且又、徳林院へ、段々御懇意御意共これ在るに付、申し聞せ候事。

知恩院方丈菅円理は、大病を患っていた住職感歴の英保亀之助との間に弟子の契約を結ぶことを、一向宗の宗体（宗侶）の子供でなければよいと、許可している。しかし、同日『日鑑』に、

一、徳林院儀、夜五ツ過、臨終致し候。

とみえるように、感歴はその夜五つ過ぎに死去してしまった。その葬礼は、十日、阿弥陀堂においてあり、華頂山に送られた。十二日、方丈（応譽円理）の焼香御礼のため、石田内匠が金百疋持参した。感歴の初七日にあたる翌十三日、徳林院弟子として英保亀之助と応譽とのお目見えの儀礼があり、非時の席において寺中にも披露された。

一、徳林院弟子英保亀之助御目見、三本入上ル、寺家中へ茂、徳林院二而、一七日非時の上申し聞せ候、則ち之を引合せ候事、

・第五世 順歴

正徳五年（一七一五）五月十五日得度。享保九年（一七二四）寂。

亀之助は翌正徳五年五月十五日に得度、順歴と称し、翌日披露された。

『日鑑』 五月十五日

一、法事後、本堂において、後住亀丸得度。順歴と取名下され候。

『日鑑』 五月十六日

一、徳林院歴順^{（順歴）}、昨日の御礼のため金百疋・樽壹・赤飯等進上、一山え弘メ有り。

この順歴の徳林院住職は異例である。彼の住職としての活動はよくわからないし、知恩院役者としての記録もない。

『日鑑』 享保二年（一七一七）三月二十六日、

一、阿蘭陀人、当山へ見物に参り候。但し、三人。御留守故、方丈内は見せ申さず候。

とみえ、以後、『日鑑』では、阿蘭陀人三人の参詣と簡略な記載があるので、オランダ人の世話をしていたことは考えられる。

享保九年（一七二四）八月十二日に徳林院へ浩徳院鑑樹が転住を命じられ、九月四日に引き移っている。順歴は、この年の七月か八月初旬に死去したものと思われる。

・第六世 弁譽鑑樹 定蓮社と号す。享保九年（一七二四）八月十二日、浩徳院より転住、寛延三年（一七五〇）五月二十日寂。

『日鑑』のオランダ人来訪の記事に「案内徳林院」と記載があるのは弁譽鑑樹からである。

『日鑑』 元文二年（一七三七）三月二十六日、

一、阿蘭陀人三人、

かひたん やんはんでんころいす（ヤン・ファン・デル・クライセ） 歳三十八

役人 てれきはんほうるはつか 三十四

外科　へんでれきはんあすとり　歳三十　来ル。

丈内・諸堂巡見。案内徳林院。（升普鑑授）

『日鑑』寛保三年（一七四三）三月二十五日、

一、阿蘭陀人来ル。山内徳林院案内。御座敷向き、別て尊牌
前の唐扉閉め候様等、下納所え申し渡す。

カヒタン　ヤアコツフハンテルワアイ　三十二才

役人　ニコラスシルウコフ　三十七才

外科　ヒイリツヒイトルムスコルス　三十三才

弁譽鑑樹は、『日鑑』によると、在住二十六年余りした寛延三年（一七五〇）五月二十日の朝に死去している。その後住として、塔頭真源院の感碩が六月十四日に転住を命じられている。

・第七世　見誉感碩　応蓮社と号す。

寛延三年（一七五〇）六月十四日住職、明和四年（一七六七）九月十一日寂。

『日鑑』宝暦八年（一七五八）三月二十五日、

一、徳林院、明日阿蘭陀人登山の届、

『日鑑』三月二十六日、

一、阿蘭陀人三人、

かひたん　へるへるとふるめいる　三十三才

役人　しよるせひいとるそん　廿七才

外科　こるねいるれすほるすとりまん　三十一才

例年之通、座敷拝見

『日鑑』宝暦九年四月五日、

一、阿蘭陀人三人、

かひたん　よわのいんおうと　年三十才

役人　にこらあすまるさんと　年式十一

外科　こるねいれすほるすとりまん　年三十才

例之通、座敷拝見

第五　下乗石について

下乗石はもと三門横に建設されたものである。明治初年に移動され、別の場所に安置されている。『知恩院史』の説明を補足して説明しておく。

「華頂山由緒系図本記」に、

「下乗石　海北雲竹之筆　胴石高さ三尺八寸五分、幅二尺三寸、厚さ一尺三寸、中台石高さ一尺四寸、幅二尺九寸、厚さ一尺九寸、下台石高さ六寸、幅三尺三寸、総高五尺八寸五分也、正徳元（宝永改元）年月日建之」

とその寸法が記録されている。¹²⁾

下乗石の建造の経緯については、正徳五年九月の京都西町奉

行諏訪正篤の証文方役人よりの問い合わせに答えた、知恩院役者の返答に詳しい。

すなわち、九月二十二日、証文方より、宝永八年正月に三門に勅額を掛けることになり、下乗札を立てたが、方丈（応誉円理）が所司代松平信庸に設置を直接願われたのか、町奉行に取り次ぎを依頼してのことなのか、奉行所の書留ではよくわからないので、その経緯を詳しく教えてほしいとの問い合わせがあった。知恩院役所では、当時の『日鑑』を調べて返答している。その書面に対して、その日の内に再度問い合わせがあり、役所から、所司代が絵図面をご覧の上、指図されたように立てた旨、返答している。

九月二十四日、西町奉行諏訪正篤は、証文方に書面の趣では、事情がよくわからないので、知恩院役所の月番役者九勝院を西町奉行所に呼び出し、よく聞くように命じている。『日鑑』にその際の質問と返答が記載されている。

『日鑑』 正徳五年九月二十四日

一、九勝院諏訪肥後守殿へ参る。証文役人罷り出。申され候者、此間申し進じ候下乗の義、御書付の趣ニ而発端知レ申さず候故、呼び寄せ承り候様ニ、肥後守申され候故、申進し候。

答ニ。御尤ニ存じ候。此儀者、其節正月、御所司紀伊

守様（松平信庸）御参詣の砌、方丈（応誉円理）直ニ、勅額掲げ申し候ハ、下乗、差し置き申し然るべく存じ候と申し候得者、成る程尤ニ候と御申し成され候。其後、十一日ニ役者御所司へ参り候時分、御額十三日ニ掲ケ申し候。然ら者、下乗の義、如何仕るべく哉と申し上げ候得者、其の場所絵図仕り、明日御差し出し候様ニとの御事故、翌日書付差し上げ候。絵図御覧の上、十四日御参詣の節、直ニ場所御検分成され、然るべき旨仰せられ候故、当分ハ石ニ成し申さず候故、角木ニ而仕り、其後石ニ致し、四月廿四日ニ立て申し候也。

両人申され候者、其の通り御書付成され、今明日中、御越し成さるべく候旨申され、退出候。

現在、宝永八年『日鑑』が所在不明なので、この『日鑑』の記事が貴重なものとなっている。このとき提出した二十四日の書付が『書簡控』に書写されている¹³⁾。

勅額とは、二代將軍徳川秀忠の寄進により建造され、元和七年（一六二一）に完成した知恩院三門に掲げられている霊元上皇直筆「華頂山」の額のことである。宝永七年（一七二〇）一月二十三日に賜わり謹刻、『日鑑』にみえるように、翌年正月十三日に掲げられた。大きさは中味の鏡板が縦一・七¹⁴⁾（五尺六寸）、横一・二¹⁵⁾（三尺六寸）。外縁を加えると総竪二・五¹⁶⁾

（八尺三寸）、総横幅一・六^尺（五尺二寸）である。裏面に「寶永七年」の銘がある。

現在、御宸翰は別に宝庫に保管されている。なお知恩院への勅額下賜は、文暦元年（一二三四）源智が法然廟堂を再興した際に四条天皇より「華頂山」「知恩教院」「大谷寺」を賜ったのに始まる。^{〔14〕}

附「参考資料」

（一）「知恩院の由緒」

知恩院が幕府にたいして、家康により將軍家菩提所として開基されるまでの由緒をいかに説明していたのかを、明和五年（一七八六）に作成された『起立開山名前・御由緒・寺格等書記』によりみておく。以下は御尋書「起立之年号、開山之名前」の返答である。

①開山

浄土宗開祖法然上人源空大和尚。勅諡円光大師、再三賜号東漸・慧成大師。智行兼備にして、諸宗高僧の戒師、及び三代の天皇戒師の徳については勅書『法然上人行状伝』に記す。

②境内の由緒

法然上人四十三歳、承安五年（一一七五）春に浄土宗を開宗

し、都に念仏一行を弘めるため叡山黒谷を出て西山広谷に住居。夢定中に大唐善導大師の念仏口伝があり、大谷吉水の地に草庵を移す。吉水の禅室とも大谷の禅室とも称した庵室は、西の本坊（清水、今の三門東南、鎮守の地）、中の坊（二岩、今の御影堂の所、広谷の庵室を移す）、東の新坊（松下、今の小方丈の地）の三坊があった。

「貼り紙追記」には、西の本坊は庵室の主でこの地にはじめて出られたときの借庵。東の新坊は空地に草庵を結んだものだが、夢定中の心地がなく、中の坊の地に「夢定中、真葛か原の様子御座候ゆへ」に広谷の庵室を移した。

権現様が慶長八・九両年（一六〇三・四）ご開基の時、広谷庵室の地（中の坊）に本堂を建立。また同十四・五両年に東の新坊の地に小方丈、西の本坊の地に元の庵主を取り払い鎮守社を建立した。この辺りはすべて真葛か原と称える地であると記している。

③廟堂と勅額

法然の流罪を述べ、承元元年（一二〇七）十一月恩免の宣旨があったが帰洛の宣旨が無く勝尾寺二階堂に草庵を結び住居。建暦元年（一二二一）十一月帰洛の宣旨があるが、上人の都の六・七カ所の庵室は荒廃し住居となしがたかった。円頓戒の弟子で念仏の一行を伝えられた青蓮院慈鎮和尚が、所領のうち大谷

山上の東西三丈余・南北十丈、南禅院と称す土地を寄進した。法然はこの庵で念仏を弘め、

翌年正月二十五日入滅、廟塔が庵室の西の山上に建てられた。次いで嘉禄の墳墓破却を記し、文暦年初に遺弟源智が復興を四条院に奏聞、院は仏殿に「大谷寺」、上人の廟堂に「知恩教院」、総門に「華頂山」の勅額を下賜。三額は応仁の乱で紛失したので、重ねて後奈良院に賜った。この後、寺焼失の際に「華頂山」の勅額が焼けたと記す。

④ 知恩院建立と山上の本堂

慶長八年（一六〇三）八月、権現様、知恩院御建立の時、法然上人・大谷三力所の庵室は念仏弘通最初の住所であり夢定中に善導大師・念仏往生の口伝のあった地である。また真葛原の心地にて二祖対顔された霊場であればと、この地に堂舎建立を命ぜられた。この地の寺院・庵室・本願寺・墳墓・百姓屋敷を取り払い、翌九年までに本堂・諸堂、同十四・五両年に諸堂・方丈を建立。方丈と庫裏門は伏見城の御殿・御門を引き移したもので、太鼓まで差し添えられた。

権現様に、昔、慈鎮和尚に給った庵室、且つ四条院に勅額を賜った山上の本堂はいかがすべきかと尋ねたところ「法然上人は権者にて本地勢至菩薩であると勅書行状伝に顕露の上は、本地勢至堂となすべし」と仰せ付けられた。よって勢至菩薩を安

置し勢至堂と称している。その節より修復を成し下されている。また勅額は、権現様の上意により「知恩教院」を勢至堂、「大谷寺」を本堂に掛けている。三門の「華頂山」は靈元院法皇の宸筆で、五十八年以前、宝永八年（一七一二）に賜ったものである（実際は前年の下賜、この年に掛ける）。

（二）「徳川家先祖と浄土宗」

増上寺はもと光明寺という真言宗寺院であったが、南北朝期に聖聰が浄土宗にあらため増上寺と称したことに始まる。江戸における念仏布教の中心であった増上寺を、家康が慶長三年（一五九八）現在地に移し、徳川家の菩提所とした。関東十八檀林の首座として宗侶を養成し、一宗を統制する機関であった僧録所増上寺と、総本山知恩院とは、徳川家先祖と浄土宗との関係を述べる際に強調される由緒が異なる。

そのことを、

（a）増上寺の享保年間（一七一六～三六）の古記録『御菩提所并御祈願所御来由』の「御先祖浄土宗門御由緒之事」と、
（b）知恩院の古記録である前述『起立開山名前・御由緒・寺格書記』の御尋書「公儀御由緒之訳」により示してみたい。

① 新田義重。

（a）「当家先祖新田義重公」往昔宗門の開祖円光大師に帰依

の趣が勅修円光大師御伝にみえる。権現様入国後、慶長十六年（一六一一）三月鎮守府將軍に贈官、大光院殿方山上西大居士と称す。同十月に新田大光院を草創につき、増上寺觀智國師に評定。同十一月觀智國師・土井利勝・成瀬政成が寺地を見分、三年をへて諸堂を造営、知行三百石を寄附。上意により滝山大善寺吞龍が転住し開山となり、十八檀林の随一と定めらる。台徳院代に常紫衣。

②松平親氏・泰親

（a）親氏公、浄土宗門に帰依し応永元年（一三九四）四月二十日逝去。松平郷高月院に葬る。泰親公も浄土宗門に帰依、永享二年（一四三〇）九月二十日逝去、同寺に葬る。逝去の年月に異説あるが、高月院の記録による。

（b）「松平先祖親氏公」とし応仁元年（一四六七）四月二十日、泰親を文明四年（一四七二）九月二十三日の死去とする。その後天文十四年、高月院に知恩院二十五世超譽上人隠居と記す。

③松平信光と信光明寺。

（a）信光公は三州岩津信光明寺を建立、菩提所と定める。親氏（芳樹院殿俊山徳翁居士）と泰親（良祥院殿秀岸祐金居士）の石塔と位牌を建て置く。自身は信光明寺開山釈譽を師範として入道、長享二年（一四八八）七月二十二日逝去、同寺に

葬る。法号は崇岳院殿月堂信光大居士。

（b）知恩院第二十一世大譽慶^{（二カ）}上人へ帰依、菩提所として信光明寺を建立。その後、明応三年（一四九四）正月、知恩院二十五世超譽上人、第三世住職となる。

④松平親忠と大樹寺。

（a）親忠公、最初より三州鴨田西光寺勢譽愚底上人に帰依。文明七年（一四七五）の頃、九年以前の伊田合戦に死亡の靈魂が昼夜鯨波をあげ、墳墓が鳴動するなどの奇異の事が多くあるが、愚底が靈魂得脱の一七日間の念仏執行すると結願の日に怪異の事が止む。親忠いよいよ帰敬し同年二月愚底を開山に一寺建立、愚底が成道山大樹寺松安院と名付けた。親忠が「大樹」とは將軍の異名と遠慮すると、愚底は「松の字は御姓の一字、安は安全の意であり、御当家天下御安治なされんことを祝して名付けた。天下安治の上は、その菩提所は自ずと大樹寺と称すべきこと。成道山とは、愚僧成道の後には、御当家を擁護し必ず天下の御主と成らせられように祈誓の意による」と返答した。甚だ感心した親忠は、寺を代々の菩提所と定めた。明応九年八月十日逝去、松安院殿大胤西忠大禪定門と号し当寺に葬送。

（b）親忠、知恩院二十三世勢譽愚底の道德により、安心あり帰依甚だし、親忠より広忠の五代を葬ると記すが、親忠死去

の年月の記載もなく簡略。

⑤親忠五男超誉存牛。

(a) 親忠五男超誉存牛上人は、信光明寺釈誉を師範として剃髮修学の後、信光明寺住職となる。後柏原院の勅命により永正十七年(一五二〇)十一月十五日知恩院へ転住。

(b) 信光の孫である超誉上人存牛大和尚は親忠の子息、出雲守長親の弟である。初め信光明寺三世住職となるが、永正十七年十一月の後柏原院の勅により、翌大永元年正月十一日知恩院住職となり、尊蓮社超誉上人存牛大和尚と号す。常に仰せられた趣は「我は勅によって知恩院住職せしめ、忝なくも浄土宗総本山の勅号を蒙る。その上、大永三年(一五二三)四月五日紫衣勅許を蒙り、かつ元祖上人例年の正忌月法要を御忌と称すべしとの鳳詔を賜る。同六年四月七日、後柏原法皇ご終焉の知識に勅請を蒙り院参、浄土奥旨一乗戒及び十念を授く」と。

この臨終の善知識をつとめたことについて、鷲尾隆康の「二水記云く」として「七日卯刻、崩御、(後)柏原院、御年六十三、臨此期、又奉移記録、知恩院長老伺候、有御十念、称名殊御高声也、正念御終焉、御往生無疑者歟、音楽之声聞虚空之由有沙汰、雖難信用、数輩触耳由称之、已上」との記事を転載する。

超誉はまた「元祖上人は後白河法皇ご終焉の知識、勅請を蒙り院参あつて、浄土奥義一乗戒を奉授なされ、御正念崩御さる。我れ法然上人の遺跡に、勅を蒙り住職せしむ。法皇ご終焉の知識の勅請を蒙る事は、浄土宗の光輝なり、我れ松平の苗姓受け、出家し、法然上人の遺跡に住職せしめ、法皇の勅許・勅請を蒙る事は、我か規模なり。我が規模は氏姓松平家の規模なれば、我か住職を後代に残さんがため当山の紋は後世に至る迄、我が氏姓の葵紋となすべき」との旨を定め置いたと記している。大永七年知恩院を辞し信光明寺に還住。天文十四年(一五四五)高月院に閑居。同十八年二月二十日、信光明寺にて遷化。御年八十一。尊師の徳業は清原良業の『和論語』に粗記載という。

⑥長親・信忠・清康。

(a) 長親公は天文十三年八月二十一日逝去、法号は棹舟院殿一閑道闍大禪定門。信忠公は享祿四年(一五三二)七月二十七日逝去、法号は安栖院殿泰孝道忠大居士。清康公は天文四年十二月五日逝去、法号は善徳院殿年叟道甫大居士。右三代は大樹寺へ葬送。

⑦家康父広忠。

(a) 広忠公は天文十八年(一五四九)三月六日逝去、法号は瑞雲院殿応政道幹大居士、大樹寺に葬送。その後、慶長十六

年（一六一一）三月二十二日從二位大納言に贈官、大樹寺殿と改称。〔正月六日は大樹寺殿御当日により、例年諸寺院年頭御礼は永式の御定である。尤も先々増上寺・伝通院以下の面々、御斎頂戴仕ると申し伝える。〕

⑧家康と大樹寺登誓。

（a）権現様（家康）三州在城の節、大樹寺はご先祖の菩提所であるため崇敬。たびたび来寺し、住持登誓天室と宗門の安心ならびに天下治定の籌作を評談。その上、住持より、白布で御軍衣を製し背後に阿弥陀の名号を拝写、念誦加持したものを奉る。出陣の度にこれを召し、かつ厭離穢土欣求浄土の八字を旗に書き記し差し上げた。後にこれを吉例の御旗と申し伝える。また、権現様は平生懈怠なく日課念仏を勤められていたが、三州出陣の際には毎度大樹寺へ詣で登誓より御十念を請けられたこと、口碑及び『甲陽軍艦』等にも分明である。

（b）には（a）の①⑥⑦⑧の記載がない。

増上寺で作成された（a）「御先祖浄土宗門御由緒之事」においては、家康が知恩院を菩提所とした由緒を、次のように新田義重の法然帰依の由緒のみをもって説明している。

知恩院ハ権現様御宗旨と申す、且新田義重公、円光大師え

御帰依之由緒を以、御治世之最初、知恩院を御菩提所に被為成候、依之、権現様御母公徳泰院様（後に伝通院殿と称し奉り候）知恩院に葬し奉る、尊影・尊牌共に御安置之御事、知恩院御菩提所に被為遊候二付、大伽藍御新宮被為遊候、

それに対して、（b）の知恩院において執筆された「公儀御由緒之訳」では、⑤の超誓の記事に続き、権現様が超誓上人の御遺示を聴き、重ねて知恩院は永世当家の葵御紋を用い、天下安全・武運長久の祈願をするようにと仰せ付けられるとともに、ご先祖が知恩院住持の由緒の故に、先祖八代の位牌を建て置きなされたものと記している。先の古記録類と同様の主張である。

註

（1）『言経卿記』の引用は大日本古記録による。山科言経の法然上人帰依・念仏信仰については、拙稿「念仏・法華経の信仰と孝経―鎌倉仏教研究の課題と検討―」（池見澄隆編著『冥顕論』、法藏館、二〇一二年）参照。

（2）『言経卿記』文禄四年九月二十五日条に、大仏経堂ニテ、太閤ヨリ、御母儀大政所御父母栄雲院道円幽儀・栄光院妙円幽儀等、御弔トシテ、八宗ニ被仰付法事有之、昔ヨリ八宗都ニ無之分有之間、新儀ニ先真言衆（東

寺・醍醐寺・高山(寺)・天台宗(七十人、加三井寺三十人)・律僧・五山禪宗・日蓮党・浄土宗・遊行・一向衆等也、一宗ヨリ百人ツ、也云々、一宗ツ、ニテ齋有之、貴賤群衆也、寅下刻ヨリ相始、申刻ニ相済了、見物予(言経)・四条(言経室の弟隆昌)・阿茶丸(子息言緒の幼名)等罷向了、と記載する。

醍醐寺三寶院義円は、八宗ではない浄土宗・日蓮宗・時宗・一向衆の大仏千僧会への出仕を、

八宗ノ次ニ出仕、末世末法アサマシキ次第也、雖然無力也(『義円准后日記』慶長五年一月二十五日)。

と歎いている。浄土宗寺院の出仕は「千僧会布施米請取状」(『妙法院古文書』、『妙法院史料』第五卷、吉川弘文館、一九八〇年)によると、百万遍(知恩寺)・黒谷(金戒光明寺)・知恩院であり、永観堂と誓願寺は交替で出仕している。河内将芳『秀吉の大仏造立』(法藏館、二〇〇八年)参照。

(3) 水野恭一郎「知恩院塔頭良正院の草創―附・良正院古文書選」(『鷹陵史学』第一四号、一九八八年。同著『吉備と京都の歴史と文化』、思文閣出版、二〇〇〇年、所収)参照。

(4) 寛永三年(一六二六)『尊牌御廟等御安置御由緒書』では、新田義重の法然帰依、松平信光の知恩院愚底への帰依、先祖超誉の知恩院住持との由緒により、家康が満誉との間で師檀の契約をし菩提所と定め置いたとする。

天保三年(一八三二)の「御菩提所知恩院御由緒」では、東照宮様御代々の御宗門と申は、御先祖新田義重公御帰依浅からざりし開山円光大師の旧跡(この旨、勅修御伝審ニ相載せこれ有り候)。なお又その後、和泉守信光君、知恩院

廿三世勢誉愚底上人御帰依浅からず。その上、廿五世超誉存牛大和尚は、右京亮(松平)親忠君第五男なり。右等の御由緒を以て、神君様、伏見御城において、廿九世満誉大僧正御師檀の御契約を遊ばされ、御治世の最初、知恩院を御菩提所ニ定め置きなされ候。

とみえる(水野恭一郎監修『知恩院史料集 古記録篇一』、一九九一年、所収)。詳細は本稿末の附「知恩院の由緒」(徳川家先祖と浄土宗)参照。

(5) この享保十六年は台徳院殿(将軍秀忠)百回御忌にあたり、一月二十四日、百部(無量寿経)法事を勤修。また、八月十一日には勢至堂の法然上人本地仏勢至菩薩像を安置する御厨子の入仏供養が修せられている。

『日鑑』享保十六年八月十一日。

山上勢至菩薩の御厨子出来、惣高さ九尺、台輪はり四尺二寸、惣屋ねはり六尺五寸、作者西村庄衛門、右代銀一貫三百目なり。これに依って、入仏供養、護念経(阿弥陀経)読誦、山内大衆出勤の事。

知恩院史料編纂所においては、昭和四十九年三月、各宗本山の史料公開の先鞭として『知恩院史料集 日鑑・書翰篇一』を刊行、平成二十四年(二〇一二)一月には、宝暦八年(二七五八)・九年・十年の『日鑑』を収録した『知恩院史料集 日鑑篇二十七』を刊行した。詳しくは拙稿「知恩院の〈近世〉―台命住職と役所『日鑑』―」(福原隆善先生古稀記念論文集『仏法僧論集』、山喜房佛書林、二〇一三年)参照。

(6) 片桐一男『京のオランダ人―阿蘭陀宿海老屋の実態―』(吉川弘文館、一九九八年)による。『阿蘭陀宿用向手続』(神戸市立博物館所蔵品目録美術の部9文書Ⅱ、一九九二年)。片桐氏「阿

蘭陀宿海老屋の研究Ⅱ史料編』（思文閣出版、一九九七年）も併せて参照されたい。

- (7) 『江戸参府旅行日記』（平凡社東洋文庫、斎藤信訳、一九七七年、底本は『日本誌』第二卷五章、一九六四年ハノー・ノーベック覆刻本）。平成三年七月三十日知恩院暁天講座におけるペートル・ボダルト・ベイリー氏の講演「ドイツ博物学者ケンペルの見た元禄時代の知恩院」（オーストラリア国立大学教授、国際日本文化研究センター客員助教授、『知恩』五六三号（平成四年三月）に収録）参照。

- (8) 【鐘楼】 われわれは広々とした丘を四〇〇歩ばかり登り、とてもなく大きな釣鐘の所へ行つたが、それはモスクワにある二番目の巨鐘と同じくらいで、長さ、つまり高さでは、むしろ勝っているように見えたが、しかし高さがあまり長過ぎていたので均整がとれていなかった。われわれの方の様式だと鐘の縁は外に曲がっているのに、この鐘の縁は内側に曲っているので鐘の響きには中にもるに相違なかった。われわれの眼前で撞木で鐘を突いてくれたが、撞木はほとんど使われたことがなく、新しいもので、鐘のわきに結んであった。鐘の厚さは一尺、高さが一六尺、周囲は二八尺八寸であった。普通の一尺は一〇寸、半尺は五寸といい、親指と人差指を伸ばして測ることができる長さと同じである。…二人の僧侶はわれわれをここから、山と境内の傾斜した向う側にあるもう一つの門まで送ってくれた。

- (9) 『京都の歴史5近世の展開』四五八～四六二頁（京都市、一九八二年）。

- (10) 藪内彦瑞編『知恩院史』第一篇第二章「歴代誌」（知恩院、一九三七年）。徳林院の八世から第十二世は次ぎのとおりである。

第八世 法誓随聞 明蓮社と号す。安永四年（一七七五）十二月一日寂。

第九世 到誓教岸 一蓮社と号す。天明六年（一七八六）二月十六日寂。

第十世 運誓義乘 載蓮社と号す。享和三年（一八〇三）六月十一日寂。

第十一世 香誓梅潮 清蓮社と号す。文化五年（一八〇八）四月六日寂。

第十二世 輦誓廓忍 桑蓮社得阿光温と号す。文政七年（一八二四）五月九日寂。

- (11) 片桐一男氏の「平戸より長崎へ移転通詞一覽」に横山又右衛門、志築孫兵衛の名が見える。同『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館、一九八五年）一〇頁。

- (12) 『知恩院史』第三篇第五章「金石遺品と銘文」（注10）八七〇頁。

- (13) 『知恩院史』にも書簡は掲載されているが、原本で読み直した上、訓読しておく。なお、翻刻は『日鑑・書翰篇五』に収録。

『正徳五年役者書簡』

正徳元年正月、松平紀伊守様歳首御仏参の節、大僧正直に申し上られ候者、勅額も近々三門え掲げ申すべく候。左候者、下乗立て置き申すべく旨申し上げ候処、尤の由、紀伊守様仰せられ候御事、

一、同十一日、役者保徳院、紀伊守様え参上の節、勅額来ル十三日二掲げ申すべく候。下乗の義、如何仕るべく候哉と御伺い申し上げ候処、場所の絵図仕り、明日持参仕るべく旨仰せ渡され候事。

一、同十二日、役者光照院、中根撰津守様（西町奉行・中根正

包)え参上。御直に三門前下乗場所の絵図御覧成され候節、伺い申し候処、直ニ紀伊守様へ参り、御用人衆を以て、伺い申すべき由仰せられ候故、何とそ此元より御伺い下さるべき旨申し上げ候処、今日此御用計にてハ参らず候不吉義候間、右の通り参上仕り申し上げ由、御差図仕り伺公、御用人安達喜兵衛を以て、其の段申し上げ候得者、絵図御覧成、三門の南松原の方、然るべく旨仰せ渡され候。

一、同十四日、紀伊守様御参詣の節、御直二三門前御覧成され、御差図を伺い相立て申し候、当分二石二而仕り難き候に付、角札仕り、其の後四月廿四日、今の石の下乗成就、相立て申し候。以上。

右の通ニ御座候。以上。

九月廿四日

(14)
『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』(京都市教育委員会、一九九二年)。

(イマホリ タイツ 兼担研究員)